



★「タイフーン」作戦、発動！

1941年9月30日。クルスク西方150kmのグルホフでドイツ第3機甲師団のIII号戦車群が、いっせいにエンジンを始動した。

グデーリアン機甲兵大將率いるドイツ第2機甲集団は、ここグルホフを起点にモスクワ西南約200kmのオリョール市と、そこから西に100kmほどの森と湿地に囲まれた鉄道交通の要衝ブリャンスク市を攻略し、ドイツ第2軍と協力してエリョーメンコ大將率いる精鋭ソ連ブリャンスク方面軍を包囲殲滅、ブジョヌイ元帥のソ連予備方面軍を撃退することになっていた。

9月12日に発令されたモスクワ攻略のための「タイフーン」作戦は、綿密に計画が検討されていた。

作戦第1段階では、モスクワ前面のソ連軍の3方面軍（西、ブリャンスク、予備）を包囲して撃滅。第2段階で残存兵力を追撃しながら、モスクワ門前に迫ろうというものだった。

先立つキエフ包囲戦で強力・強大な南西方面軍を全滅させられ、捕虜だけで66万5000名もの損害を出したソ連軍にとって、モスクワ前面にある約80万人の3方面軍がソ連の命運を支える最後の柱ともいえるものであった。

続く10月2日には、グデーリアン機甲集団の北450kmにわたって展開したドイツ第9、第4、第2軍、ホト大將の第3機甲集団、レニングラードから転戦したヘブナー大將の第4機甲集団、すなわちドイツ中央軍集団の全軍がソ連軍防衛線に向けて攻撃を開始した。

ケッセルリンク元帥のドイツ第2航空軍の緊密な支援

をうけて、グデーリアン部隊の前進はきわめて順調に進んだ。ソ連第13軍の防衛陣地は簡単に突破され、ブリャンスク方面軍は大混乱に陥った。

スターリンは、この方面にグデーリアン機甲集団が配置されていることを重視し、ブリャンスク方面軍部隊の兵力・装備の充実にとくに力を尽くしてきた。そして、極東方面からエリョーメンコ大將をわざわざ呼びよせて、9月半ばに司令官として就任させ期待を寄せていたが、いまだ砲兵や戦車部隊などは諸兵種間の協同に熟達していなかった。ましてや航空兵力に劣っているもとは、経験を積んだ精鋭ドイツ機甲部隊の敵ではなかった。

グデーリアン麾下の第24機甲軍団の先頭部隊は、攻撃開始日だけで130kmも前進した。モスクワまで、あとわずか200km余りである。

★ジューコフ、モスクワへ

まだ市電が通勤客を乗せて走っているオリョール市の街路で、グデーリアンのIII号戦車部隊がソ連軍と勘違いした市民から熱狂的な歓迎をうけていた10月5日、レニングラード方面軍司令官ジューコフ上級大將はスターリンから電話を受けていた。

「レニングラードの戦況はどうかね？」

「平静ですね。砲撃は激しいものがありますが、ドイツ歩兵は塹壕を掘っています。ここしばらくは、攻勢に出ることはありますまい」

「飛行機ですぐにモスクワにこれないかね。モスクワ前面ユフノフ地区の左翼の情勢が悪化した。最高司令部は、必要な措置について君と相談したい。司令官は、ホー

首都攻略の気概に 燃えるドイツ軍の 前に立ち塞がった 泥将軍とロシア人 の奮戦



古是三春

ジン大将に引き継ぎたまえ」

7日、ジューコフはモスクワに到着、スターリンやシャポシニコフ参謀総長と相談の後、乗用車で直ちに戦線に向かった。

「西方面軍からも、ブリャンスク方面軍からも報告が入らん。ブジョヌイ元帥は、予備方面軍司令部の居場所すら知らない始末だ。いったい戦線が何が起こっているのか、君の目で直接調べて、時間を選ばずに電話をくれたまえ」

最高司令官スターリン代行の肩書きを得て、ジューコフは西方面軍司令部、予備方面軍司令部や最前線を精力的にまわり、状況を調査。コーネフ大将に代わって西方面軍司令官に就任し、部隊の再編成と防衛線の再建に着手した。道すがら個々に防衛線についていたり、待機していた歩兵部隊や戦車旅団を掌握しながら、文字通り全てをかき集めていったのであった。

★「泥将軍」の到来

「タイフーン」作戦第1段階は、成功裏に終了しそうであった。10月4日には初雪が降り、舗装されていない道路や草原は泥沼と化した。ドイツ軍は、全歩兵師団を投入して道路の補修にあたり、短期間に機甲・車輛部隊の移動を可能にし、6～7日までにあいついでブリャンスク、ヴィヤジマなどを陥落させた。こうしてソ連西方面軍、ブリャンスク方面軍の主要部隊は、総てドイツ軍の包囲下に置かれてしまった。約80師団である。

もはやモスクワを守るべき盾と剣を、ソ連は失ったかに思えた。しかし、ドイツ軍指揮官たちの歓喜も長くは

続かなかった。

初雪から、続く秋雨のために泥沼と化した草原や森林、湿地帯にうごめくソ連軍部隊に対して、動きのとれなくなったドイツ戦車部隊はまったく無力になってしまった。せっかく包囲した敵部隊を急速に殲滅することができなくなってしまったのである。いきおい、薄い包囲網を固める大役は、ドイツ歩兵の両肩にのしかかってくる。

「包囲、包囲、また包囲か！包囲をぬけたらまた包囲だ……」。ブリャンスク方面軍のソ連兵たちは、ひまわりの種をかじって飢えをしのぎながら、ひざまでの深さにかみつく泥の中を群れをなしてさまよっていた。

夜になると、ソ連の騎兵、歩兵、後方部隊などが森の中からいっせいに動き出す。あちこちで機銃の曳光弾が飛びかい、白兵戦が起こる。「いったいどちらが包囲されているんだ!」。ドイツ兵たちは、片時も警戒陣地の中で銃床から肩を離せない。

こんな戦いが10月17～19日頃まで続き、ドイツ軍部隊は大いに手こずられ、損害も増加した。

しかし、この混戦も最終的にはドイツ側に軍配があがった。捕虜は66万3000名となり、キエフ包囲戦に続く大戦

モスクワを守りぬいた男、ジューコフ上級大将



果であった。戦意を失い、連隊ごと降伏する部隊もあいつぎ、モスクワを守るべきソ連軍の大部隊は、西方の捕虜収容所へかりたてられていった。

★赤軍精鋭部隊、ドイツ軍の前進をはばむ

グデーリアンの機甲部隊が、オリョール市やブリャンスク市を攻略した6日、モスクワ南方の要衝ツェラ市攻略を目指すドイツ第4機甲師団は、ムツェンスク南方で停滞中に一群のT-34戦車の襲撃を受け、大損害を出した。

十数輦のT-34は、泥のためほとんど動きのとれないIII号戦車の5cm徹甲弾をことごとく跳ね返し、道路上に停止中の装甲兵車や戦車、輸送トラックに片端から76.2mm砲弾を見舞い、ゆうゆうと泥沼と化した草原の彼方にひきあげていった。カツコフ大佐の率いる第1戦車旅団である。

この部隊は、スモレンスク大会戦後、急遽編成された旅団で、ほとんど壊滅したソ連機械化部隊の生き残りの

兵士と戦車製造工場の職員、戦車学校生徒によって、スターリングラード・トラクター工場からロールアウトしたばかりのT-34戦車54輦で編成されていた。これまでの通常編成の戦車旅団（戦車100輦）の半数の戦力であったが、戦車戦術に不慣れなソ連軍戦車指揮官にとって、使いやすい規模であった。

カツコフのT-34旅団は、その後も手痛い打撃をドイツ第4機甲師団に与え続けた。9日にムツェンスク占領を命じられた同師団に対して、カツコフ旅団は全力で反撃、またも大損害を与えたのだった。

戦線を訪れた第2機甲軍（集団から軍に、この間に昇格した）司令官のグデーリアン機甲兵大將は、こう述べている。

「ソ連軍戦車の性能と、その戦術に関する報告は、わが軍にとってはなほだ不利なものであった。われわれの対戦車兵器では、ソ連のT-34戦車に対してよほど状況が有利でないかぎり、ほとんど歯が立たないのである。わが軍のIV号戦車の短砲身7.5cm戦車砲でT-34をやっ

タイフーン作戦参加のドイツ軍部隊(1941年10月2日)

第9軍（シュトラウス上級大將）

第27軍団

第86歩兵師団、第162歩兵師団、第255歩兵師団

第5軍団

第5歩兵師団、第35歩兵師団、第106歩兵師団、第129歩兵師団

第8軍団

第8歩兵師団、第28歩兵師団、第87歩兵師団

第23軍団

第102歩兵師団、第206歩兵師団、第251歩兵師団、第256歩兵師団

予備：第161歩兵師団

第3機甲集団（ホト上級大將）

第66機甲軍団

第6機甲師団、第7機甲師団、第14自動車化歩兵師団

第41機甲軍団

第1機甲師団、第36自動車化歩兵師団

第6軍団

第6歩兵師団、第26歩兵師団、第110歩兵師団

第4軍（フォン・クルーゲ元帥）

第7軍団

第7歩兵師団、第23歩兵師団、第197歩兵師団、第267歩兵師団

第20軍団

第15歩兵師団、第78歩兵師団、第268歩兵師団

第9軍団

第137歩兵師団、第183歩兵師団、第263歩兵師団、第292歩兵師団

第4機甲集団（ヘブナー上級大將）

第12軍団

第34歩兵師団、第98歩兵師団

第60機甲軍団

第2機甲師団、第10機甲師団、第258歩兵師団

第66機甲軍団

第5機甲師団、第11機甲師団、第252歩兵師団

第62機甲軍団

第20機甲師団、SS自動車化師団ライヒ、第3自動車化歩兵師団

第2軍（フォン・ヴァイクス上級大將）

第53軍団

第31歩兵師団、第56歩兵師団、第167歩兵師団

第63軍団

第52歩兵師団、第131歩兵師団

第13軍団

第17歩兵師団、第260歩兵師団

予備：第112歩兵師団

第2機甲軍（グデーリアン上級大將）

第34軍団

第45歩兵師団、第134歩兵師団

第35軍団

第95歩兵師団、第262歩兵師団、第293歩兵師団、第296歩兵師団

第48機甲軍団

第9機甲師団、第16自動車化歩兵師団、第25自動車化歩兵師団

第24機甲軍団

第3機甲師団、第4機甲師団、第10自動車化歩兵師団

第47機甲軍団

第17機甲師団、第18機甲師団、第29自動車化歩兵師団



圧倒的な機甲戦力を中心としたドイツ軍は、タイフーン作戦発動後、一路モスクワをめざして突き進んでいった

けるには、後ろから接近してエンジン上部の格子面を貫通させる以外手段はない。…ソ連軍はまず狙撃兵（歩兵）を正面から攻撃させ、その間に戦車をわれわれの側面に向かわせた。しかもこの方法を集団的に用いるようになってきた」。

ドイツ側の損害の多さに比べて、ソ連軍の損害はあまりに少なかった。不吉な予感がよぎった。現場のドイツ指揮官が受けたショックは大きかった。

今や「泥将軍」に助けられて、各地でごく少数のソ連軍部隊がドイツ軍の先鋒部隊をくい止めつつあった。

モスクワ南西、わずか100kmのカルーガ市前面のウグラ川にそったブリャンスク〜モスクワ鉄道をめぐる戦線では、ポドリスク士官学校部隊の分遣隊（マムチク上級中尉指揮の1コ中隊）とスタルチャク少佐指揮の空挺大隊（400名）が、鉄橋奪取を狙ったドイツ第43歩兵軍団の部隊を撃退し、鉄橋爆破の時間かせぎに成功した。この鉄橋が奪取されれば、モスクワまでドイツ軍をくい止

める障害は何もない状況であった。

このように、ソ連の3方面軍の包囲・壊滅の状況下で、ごくひと握りのソ連軍部隊の奮闘が、かろうじてドイツ軍のモスクワへの突入を防げ、防衛戦再構築の時間をかせいだのであった。また、これを可能にしたのが「泥将軍」の到来だった。草原や森林が秋雨で泥沼と化した今、戦場の焦点はごく限られた鉄道や道路の十字路や合流点となり、これらの地点は少数の兵力で多数の攻撃軍を牽制しやすいものとなった。

★飛躍的に強まるソ連軍の抵抗

カツコフのT-34旅団などごく少数の、しかしながら勇敢なソ連軍部隊の奮戦や、ブリャンスク・西両方面軍の包囲殲滅にドイツ軍が手こずったことなどによって得られた時間を、ジューコフは有効に活用した。

10月7日までに各線戦からひきぬかれた歩兵師団11コ、戦車旅団16コ、砲兵連隊40コをジューコフはモスクワ前

オリョール市に入城した第2機甲軍の兵士たち。タイフーン作戦当初、ドイツ軍の進撃はきわめて順調に進んだ



面のモジャイスクで受け取り、残余の部隊と合わせて第16、第5、第43、第49軍を再編成し、カリーニン市～モジャイスク市～カルーガ市を結んだモジャイスク防衛線を構築した。この結果、10月中旬の段階でソ連西方面軍の総兵力は9万を超えたが、強大なドイツ中央軍集団の攻撃を受け止めるには、まだまだ兵力不足といわなければならない。このためジュコフは、兵力の不足を「鉄の規律」と精鋭部隊の重要地点への重点配備で補おうとした。

夏以来、機甲師団を中心としたドイツ軍から強力な攻撃を加え続けられ、大きな損害を出してきた残余のソ連軍部隊の士気は衰えがちであった。ジュコフ上級大將は、これらにムチを振るうことに何らためらうことはなかった。「命令なき後退をした部隊の指揮官は銃殺」一崩壊寸前のレニングラードでジュコフが使ったこのムチは、モスクワ前面でも敗北的気分の一掃に力を振るった。

加えて精鋭部隊＝極東方面からの増援部隊が、ソ連軍の「隠し玉」となった。最重要防衛正面に配置されたリュシェンコ中将指揮の第5軍に配備されたシベリア第32狙撃兵師団、オルレンコ戦車旅団などである。これら精鋭の威力を、ナポレオン戦争時の古戦場ボロジノで、ドイツ軍はイヤというほど味わわれることになった。

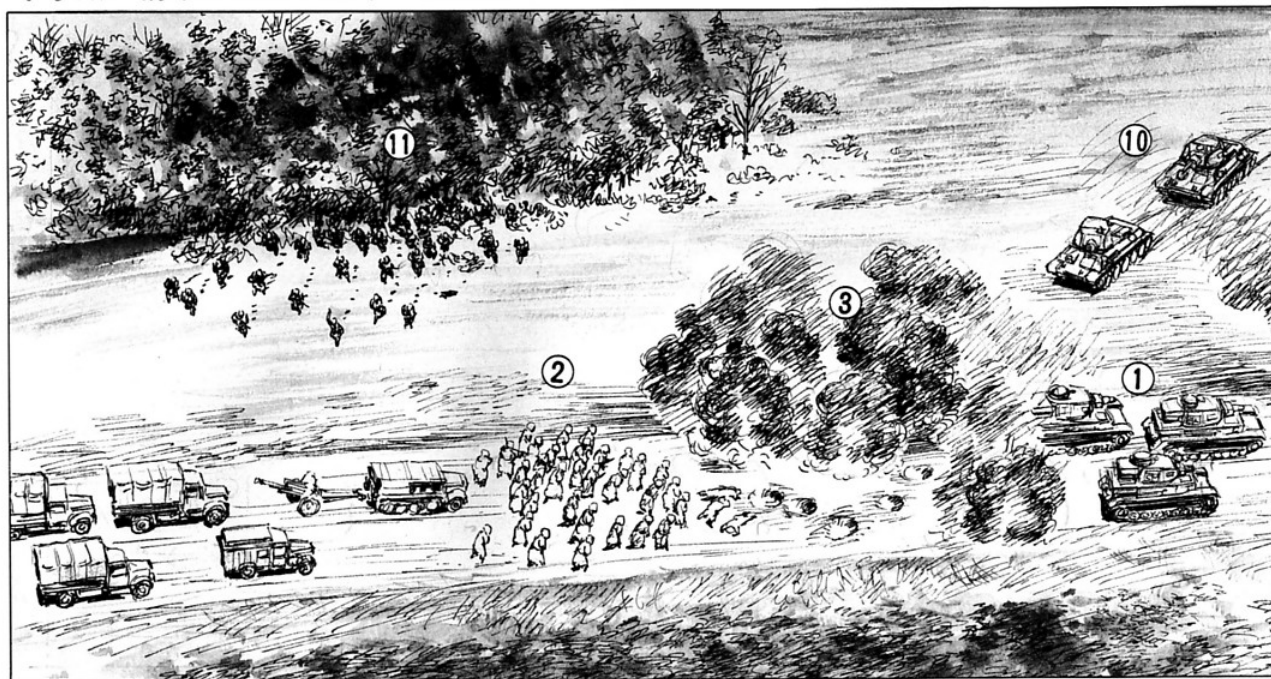
10月14日。ヘブナー大將の第4機甲軍に属したSS自動車化歩兵師団ライヒと第10機甲師団の一部は、ボロジノ前面でソ連第32狙撃兵師団と激突した。極東方面で日本軍相手に経験を積んだボロスーヒン大佐に率いられたシベリア兵たち、それに加えて初めて実戦に参加したモスクワ労働者義勇兵部隊＝「槌と鎌」工場の労働者連隊、政治将校養成学校であるレーニン・アカデミー学生部隊は、ドイツ戦車と精強なドイツ親衛隊歩兵を相手に一歩もひかない戦いぶりを示した。

陣地戦突破をはかったIII号戦車には、14.5mm対戦車ライフルから76.2mm野砲（いわゆるラッチュ・バム）、85mm高射砲にいたるまでの各種口径砲弾が浴びせられた。さらに接近した塹壕からは、機銃火にめげずに労働者義勇兵がとびだしてきて、「モロトフ・カクテル」（火炎瓶）を投げつける。このためソ連軍陣地帯の中で擱座炎上するドイツ戦車が続出し、脱出した戦車兵は銃剣とスコップの餌食となった。

ドイツ側の正面攻撃がその都度ついでると、オルレンコ大佐の戦車旅団がT-34の群れを戦場に放ち、激しく追撃をかけてくる。勇敢な親衛隊員の肉薄攻撃と第10機甲師団のベテラン戦車兵の巧みな反撃で、かろうじてT-34を仕留めても、攻撃線から後退中のドイツ軍部隊がパニックに陥ることもしばしばだった。

十字路に構築されたソ連軍の防禦陣地の一例

イラスト ■ 小林源文



秋雨によってロシアの大地は泥沼と化し、ドイツ戦車はほとんど道路上しか移動できなくなった。このためソ連軍は、十字路など歩兵と戦車が分離④対戦車バリケード⑤対戦車壕⑥対戦車ライフルや機銃が配備された歩兵陣地⑦対戦車砲陣地（高射砲も使用）

何度も正面突撃を繰り返したライヒ師団の損害もうなぎのぼりで増え、第3連隊は壊滅して残余の兵を残りの2コ連隊に配置換えしたほどだった。

「あと100kmだ！なんとしても突破して、ケリをつけるんだ」―多大な損害にめげず、ドイツ親衛隊歩兵は攻撃を繰り返し、とうとうボロジノの堅陣を突破した。

10月19日、ドイツ軍はボロジノ後方のモジャイスク市を占領し、後はモスクワまで舗装された自動車道路100kmを残すのみとなったが、戦意の衰えないシベリア第32狙撃兵師団は大損害にもめげず、新たな陣地に秩序を失わずに後退して激しい抵抗を続けた。

★「武器工の町」ツォラ市ぬけず

「タイフーン」作戦第1段階を一応終息させたドイツ中央軍集団南翼＝グデーリアンの第2機甲軍は、ただちに第2段階、すなわちモスクワ南部のツォラ市、カシーラ市（同市には、モスクワに電力を供給する大発電所がある）を通してモスクワ背後のゴーリキー市に達し、最後の包囲圏を完成させる仕事にとりかかった。

泥とときおり襲ってくるT-34戦車の群れに悩まされながらも、ドイツ第24機甲軍団の先鋒を務めるエーベルバッハ戦隊（同軍団のすべての戦車と精鋭グロス・ドイツチュラント歩兵連隊、第75砲兵連隊をまとめて、第4機甲師団のエース、エーベルバッハ大佐の指揮の下に置いたもの）は、がむしゃらに前進した。「目標、ツォラへ



ドイツ戦車を迎え撃つべく展開したソ連対戦車砲部隊

前進！」。

こうして10月29日には、人口30万の「武器工の町」ツォラ市郊外に突入した。しかし、有名なツォラ造兵廠の労働者たちは、恐るべき戦意を秘めてドイツ軍を待ち構えていた。

10月に入って以来、ツォラ市にはドイツ軍の包囲網を逃れてきたソ連第50軍、第13軍の将兵たちが少人数のグループごとに後退してきていた。ツォラの住民たちは、通りをとぼとぼ歩く兵士たちに食物を与え、家や工場に招いてボロボロの軍服をつくらったり、壊れた兵器の手入れや交換を行っていた。

早くも結成されていた労働者義勇連隊の共産党政治委員たちは、敗残の兵たちに呼びかけた。

「同志諸君、わが誇り高き武器工労働者は、断固ファシストを通さない決意だ。武器も食料もある。共に戦おう！うしろはモスクワだ！」

労働者義勇軍とブリャンスク方面軍残余部隊を統合した同市防衛司令官ボボフ中將は、市にふんだんにあった



に強力な防禦陣地帯を構築し、ドイツ軍を迎え撃った。①道路上しか移動できないドイツ戦車②ドイツ軍歩兵③砲兵の砲撃により⑧迫撃砲陣地⑨砲兵陣地⑩後方より出撃したT-34（接地圧が低いため路外機動が可能）⑪森林から後続部隊を襲撃するソ連歩兵



ドイツ第2機甲集団（後に軍）司令官グデーリアン上級大将。ツォラ市攻略の彼の意図は、同市にたてこもる労働者義勇兵らによって打ち砕かれた

対戦車砲に防空軍の85mm高射砲を加えて、市の外周に強力な対戦車陣地を構築。各所の家や建物には、歩兵を配置して死守の構えを確立した。

エーベルバッハ戦隊は、この固い防衛陣に頭から突入し、大損害を出した。III号、IV号戦車群は、45mm対戦車砲と85mm高射砲などの砲火によって次々に撃破された。1時間のうちに、ある1門の85mm高射砲が32輛ものドイ

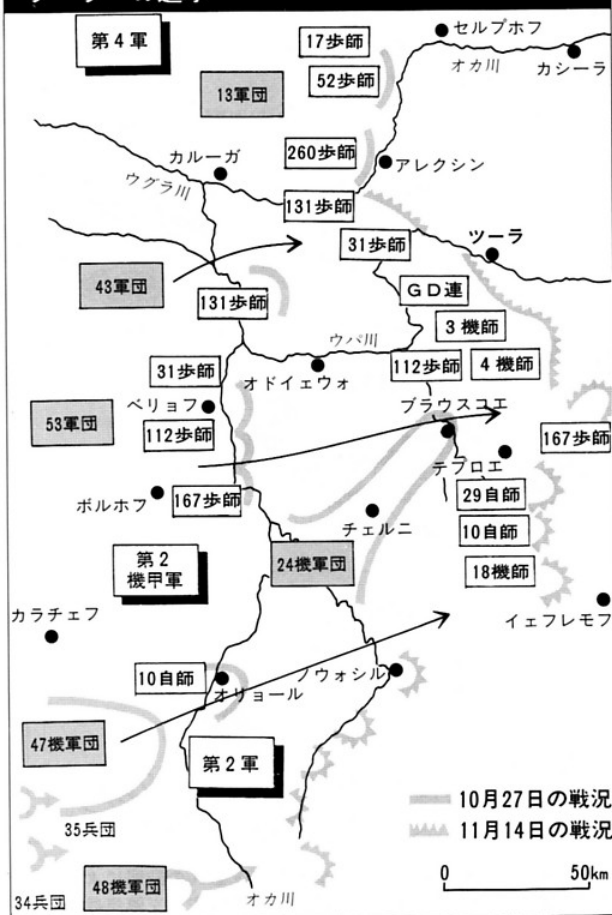
ツ戦車を撃破するなど、ソ連砲兵はアフリカ戦線のドイツ高射砲兵なみの働きでドイツ機甲部隊の突破を許さなかった。

それでも精鋭グロス・ドイッチュラント連隊は、市郊外から市内近くまで浸透し、激しい市街戦を展開したが、一軒一軒の家にたてこもって熱狂的に戦う労働者義勇兵を掃討しきれず、逆に何度も押し返された。ツォラの労働者は、武器造りのみならず武器を使いこなすことにも長けていた。

31日には、損害のあまりの大きさに、グデーリアンはツォラ攻略をあきらめなくてはならなくなった。同市攻撃に参加した第3機甲師団は、150輛あった戦車が攻撃中止時には、実にたった40輛に減っていたのである。

もはや「電撃戦」の威力に翳りがさしつつあった。ドイツ第2機甲軍は、ツォラ市を大きく迂回してカシーラ市～ゴリキー市に前進しようとしたが、今や要塞と化したツォラは、グデーリアン軍の側面深く突き刺さったままその戦力を分散させて、衝撃力を劇的に弱めてしまった。

ツォラへの進撃



★ドイツ軍の面前で「革命記念パレード」

「泥将軍」とソ連軍の強まる抵抗のため、ドイツ軍の前進がひとまず停滞し始めた10月末～11月初め、政府と各国外交機関がほとんど疎開を終え、一時蔓延したパニックも「戒厳令」の実施で落ち着いてきたモスクワ市は、10月社会主義革命24周年記念日（11月7日）を迎えようとしていた。

世界中が固唾をのんで「赤色ロシアの崩壊」のさまをみつめている正にその時、「赤の広場」では驚くべきことが起こった。

11月7日朝9時、伝統的なファンファーレを合図に毎年恒例の革命記念軍事パレードが開始されたのである。

「野蛮なファシストは、セチノフとパブロフ、グリーンカとチャイコフスキー、クジマ・ミーニンとトルストイ、スヴォーロフとクツォフ、プレハーノフとレーニンを生んだ偉大なロシア民族を絶滅させることはできない！」

スターリンの煽情的な民族的アジェーションの演説のあと、戦線から引き抜かれた各兵種の代表部隊がレーニン廟の前を行進した。

このさまは、ラジオで世界中に中継された。

「スターリンは、モスクワにいる」

「モスクワは陥落しないんだ」

ドイツ軍の面前で行なわれたこのパレードは、西ヨーロッパのドイツ占領地に大きな反響をよび、レジスタンス運動が鼓舞されることとなった。39年の「独ソ提携」で壊滅的打撃をうけた各国共産党系抵抗運動（フランス

►ぬかるみに足をとられる第5機甲師団のIV号F型。ロシアの「泥将軍」は、じわじわとドイツ戦車の機動力を奪っていった▼ドイツ戦車より履帯幅が広いT-34は、泥沼や雪原と化したロシアの大地をものともせず、敵戦車を屠っていった



のマキなど)の再建が急速に進むきっかけとなったといわれる。

各地の防空戦闘機をかき集めての蔽戒体制のもとで舉行されたとはいえ、わずか数十kmに迫ったドイツ軍を横目に、まもなく革命記念式典を成功させたことは、ソ連軍のあらゆる階級の将兵に大きな自信を与えた。

★ドイツ軍、冬期攻勢強行を決定

本格的な寒波が訪れ、泥道も固く凍結して車輛の通行が可能になった11月初め、ドイツ軍内部では「攻勢継続か、来春再開・越冬か」をめぐる議論が起こっていた。

ドイツ軍総司令部は、「攻勢継続」を主張していた。第3、第4機甲集団および第4軍の先鋒部隊からクレムリンまで、わずか50kmまで迫った状況下で、「勝利は目前」との見方が強かった。

一方、中央軍集団内の各軍司令官の意見は、様々であった。前線部隊の消耗は激しく、各師団はよくて定数の50%、著しいものは30%にまで戦力が低下していた。補給に対する見通しの誤りから、冬期用の衣料の到着が遅れ、ほとんどのドイツ兵は薄手のコートのみか、現地住民から徴発した婦人用防寒着を身につけている始末だった。パーツの不足から整備不良となり、動けなくなった戦車も続出し、ソ連軍による損害に加えて戦力低下に拍車を

かけた。

しかし、中央軍集団司令官のボック元帥も「攻勢継続」を強硬となえた。極東から移動してきた新鋭ソ連部隊に直面した事から、これ以上時間を延ばせば戦力バランスがドイツ側に著しく不利になりかねなかった。ひくにひけない状況に陥っていたのだ。

こうして11月12日、オルシャ市で行なわれたドイツ参謀総長ハルダーを初め、東部戦線の3軍集団（北方、中央、南方）の主要指揮官を集めての会議で、「モスクワ冬期攻勢」の実施が決定され、攻撃は11月17日に開始された。

★「クレムリンまでバスで45分だ！」

北はカリーニン市から南はトゥラ南東部まで、ドイツ中央軍集団はいっせいに攻撃を開始した。

薄手のコートを着込み、鉄帽の下で頭と顔をマフラーで二重三重にまいたドイツ歩兵たちは、健気にも激しい戦意で突撃した。「目標、クレムリンまで突撃！」。

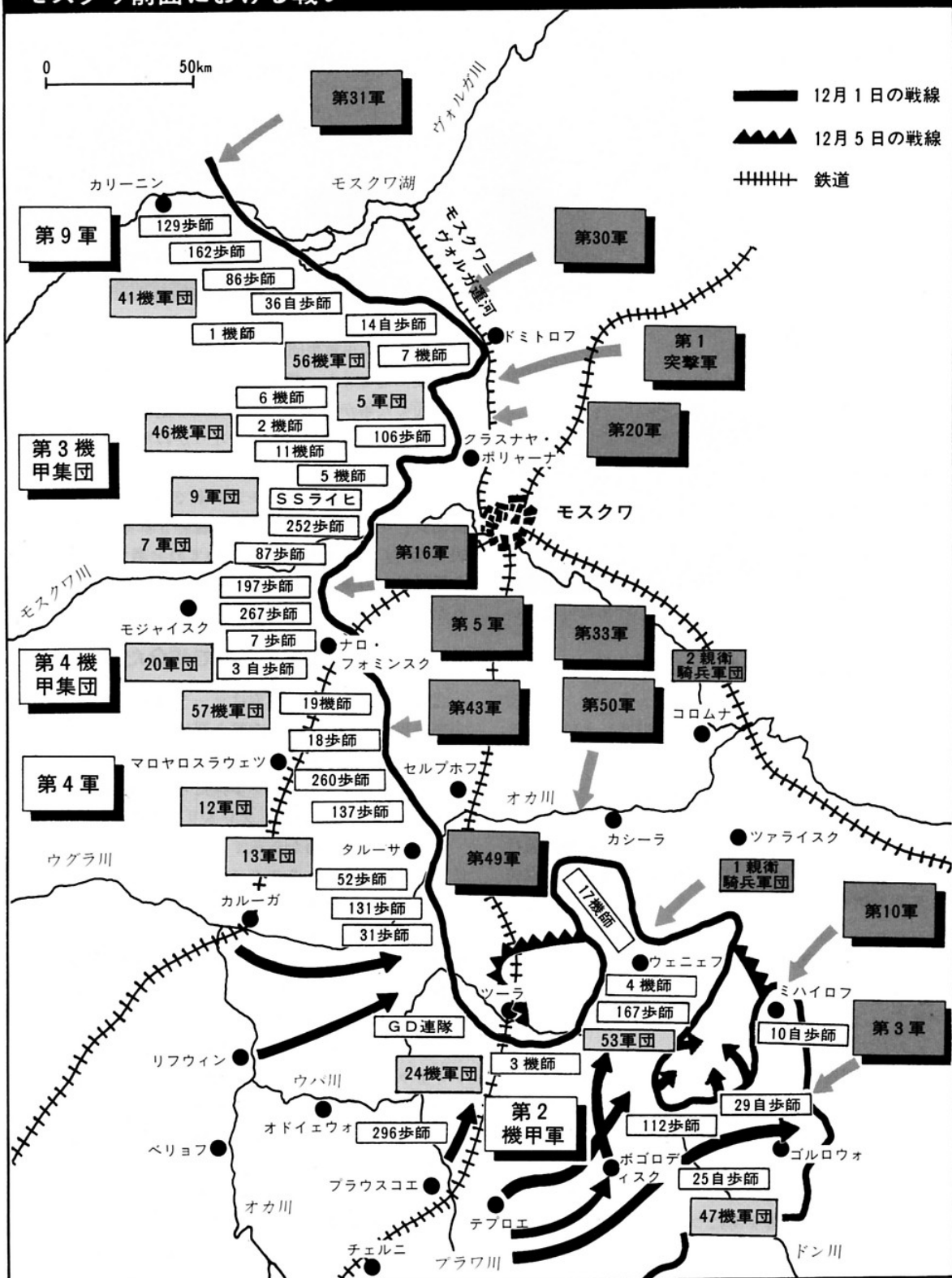
司令官がホット大将からラインハルト大将に交代したドイツ第3機甲軍は、モスクワ北東からロコソフスキー中将指揮のソ連第16軍の戦線を激しく攻めた。

ロコソフスキー軍は、中央アジアのカザフ共和国から増援されたパンフィーロフ少将指揮の第316狙撃兵師団が主力であったが、そこにラインハルトの全機甲兵力が殺到した。しかし遊牧民出身のカザフ兵は、ドイツ戦車群をほとんど恐れず、14.5mm対戦車ライフルと「モロトフ・カクテル」で断固として反撃した。

例えばクロチコフ大隊政治委員の指揮するカザフ兵2コ小隊は、20輦のドイツ戦車を撃破、政治委員自身も爆薬で戦車に体当たりして壮絶な戦死をとげた。

しかし、ドイツ側も決死の覚悟で突破を強行した。ラインハルトの戦車兵たちは、損害にかまわずカザフ兵陣地を通過し、モスクワ〜ボロコラム街道を突進したのである。ロコソフスキーのソ連第16軍は分断され、モスク

モスクワ前面における戦い



ぬかるみと寒さ、そしてソ連軍の巧みな戦術と物量によって疲弊したドイツ軍に対し、ソ連軍は12月6日、本格的な反撃を開始した



ワ市に飲料水を提供するイストラ貯水池まで後退しなくてはならなかった。

ジュコフはこの時、ロコソフスキーに対して電話で「なぜイストラまで後退するのかね？現在地にふみとどまって死守したまえ！」と猛烈に叱咤している。ジュコフにとって、ロコソフスキーはかつての上司である。

しかし、救いの手は差し延べられた。モスクワ南方に展開していた勇者カツコフ大佐の第1戦車旅団が、首都モスクワの発達した交通網によって、わずかな時間で第16軍に移送され、とりあえず急場を救った。

モスクワ市周囲の防衛線は、いずれも激しいドイツ軍の攻撃を受け、いまだ兵力が不足しているソ連軍が窮地に陥る場面がしばしばだったが、第16軍の例のように小部隊から大部隊までを、モスクワ市内の鉄道や道路網で急速に配置転換してしのいでいった。ジュコフは、大都市の機能を防衛戦にフルに活用したのである。

ツーラ市～カシーラ市周辺では、ひき続きグデーリアンの第2機甲軍がモスクワ南翼に手を伸ばそうと苦心していた。とくに邪魔なツーラ市を分断しようと、市北部のモスクワ～ツーラ街道に第3機甲師団を進出させた。しかし、同方面には極東からゲトマン少将指揮のソ連第112戦車師団とペロフ少将指揮の第2騎兵軍団が増援され、これらが直ちに戦力の減ったドイツ戦車部隊に襲いかかったのである。

10日間にわたる一進一退の末、グデーリアンは「この方面からのモスクワ侵攻は断念」せざるを得なくなった。このような混戦が11月いっぱいモスクワ西部で続いた。「クレムリンまでバスで45分だ！」

モスクワ郊外の村、クリンのバス停に立ったドイツ兵たちは喜びあった。あるオートバイ偵察小隊は、クレムリンからわずか9kmに到達した。だが、それ以上進むことはできなかった。ますます新手のソ連軍部隊が出没するのに対し、ドイツ軍部隊の兵力は先細るばかりだった。

★ジュコフ、機を逸さずに反撃

12月6日夜、モスクワ北部の雪原に「円形陣」を作っていたドイツ第6機甲師団前面に、いっせいに松明がともった。と同時に「ウラー」の叫びがあがり、暗闇からソ連兵の大軍が押し寄せてきた。レリウシェンコ中將指揮のソ連第30軍の反撃が開始されたのである。夜戦の苦手なドイツ戦車は、手も足も出ない。

同夜、モスクワ周囲の各戦線では、同様な光景が展開された。スターリンは苦戦の中でも手つかずの3コ軍を予備に置いておき、それを投入してジュコフに反撃を命じたのだ。歩兵数で同等、戦車数ではドイツ側に劣る状況下での反撃だったが、ドイツ軍の疲弊が極に達した時期を逸することなく的確に実施されたため、ドイツ中央軍集団は、全体で100～300kmも押し返されることとなった。

モスクワは救われた。ソ連にとって「始まり」が終わったのであり、ドイツにとっては「終わり」が始まったのである。

門前までせまったとはいえ、補給が滞り冬期装備も不足したドイツ軍にとって、モスクワはあまりにも遠い目標だった

